

20260614南柯句会下鴨吟行

9点句

朽木にもなお神宿る木下闇 柚実

特選 二晁
並選 福田洗弥・美也子・ひろし・孝・洋子・
こぐさ・しょうん

特選

二千年の森朽木も神の様に崇められて
います。(二晁)

並選

朽木にしめ縄が有り 敬う心を感じまし
た。(孝)

8点句

神域を踏みてこれより青葉闇 町彦

並選 富野香衣・福田洗弥・ひろし・疾風・二晁・
孝・柚実・ゆたか

並選

人と神との境界線を上手く詩情にのせた
と思います。(富野香衣)

街中から神域に入る。厳かな気持ちにな
ります。(二晁)

ガラッと空気感が変わりました (孝)

糺の森のありようを素直に感じられる素
敵な句だと思いました。(柚実)

転けてより大胆になる水遊び 和田桃

特選 町彦・孝
並選 美也子・秋霜・しゃぼん・しょうん

特選

水辺で慎重に遊んでいても、滑って転ん
でぶ濡れになった。後はなるようになれ。
誰もが分かる心境である。吟行句ではない
が、特選とした。(町彦)

鴨川に遊ぶ子らの多い中 転んでしまっ
てもういやと一段と元気出して遊んでる
子どもと見守ってる側の顔も浮かんできて
吟行ならではの句だと感じました (孝)

並選

子供が川遊びをしていて転びました。後
は濡れついでです。親は慣れているのかた
だ見守っています。(美也子)
よく観察されている一句。(秋霜)

そうそうおさなごの水遊びはこうであ
る。わざと転ぶ。全身で水と交流する。

(しゃぼん)

鴨川、飛び石あたりでしようか？ こうい
う光景を目撃し即興の句となるとところにレ
ベルの高さを感じました。(しょうん)

6点句

朱の鳥居朱の神殿に青葉降る 太陽

特選 和田桃・石黒
並選 秋霜・洋子

特選

人 朱と青の色彩を意識した句。
下鴨神社が美しく詠まれています
(和田桃)

朱のたたみかけと青葉とのコントラスト
がいいと思いました。(石黒)

並選

色彩のコントラストが上手い。(秋霜)
豪商の池にざわめく水すまし 和田桃

特選 柚実・にこぐさ
並選 孝・福田洗弥

特選

今は穏やかで静謐な館ですが、豪商になるまでにはいろいろあったと想像します。その感じがざわめく感じと、水すましの涼やかな姿の対比に感じられて良いと思いました。
(柚実)

旧三井下鴨別邸の庭の瓢箪池の水すましは何を思っているのかいないのか
(にこぐさ)

並選

ほんとに沢山居ました
(孝)

六月の花嫁御寮の朱傘かな 美也子

特選 和田桃・しょうん
並選 石黒・福田洗弥

特選

地 6月に結婚した花嫁は一生幸せになる
花嫁行列をみて私まで幸せな気分になりました。
(和田桃)

六月はジューンブライドだろうが、この緑の深くなる季節の印象も含んでいる。緑と朱の色彩の際立ちを美しく鑑賞した。六

月の花嫁は幸せになるというのが、朱傘の朱が邪気を払うというので、句はその幸せを予感させている。花嫁御寮を京の吟行らしく受け止めた。
(しょうん)

5点句

ほろほると葵最中や夏の風 よし

並選 清史・柚実・太陽・にこぐさ・疾風

並選

出町ふたばの最中が食べたくなりました。ほろほるとモナカの皮が口中でほどけて溶けていく感じが好きです。
(柚実)

全体的に濃いので、さっぱりした句でほっこりしました。
(太陽)

4点句

鴨川を挟みて歩む友と夏 太陽

特選 清史
並選 よし・疾風

並選

青春：ですね。空間を含めた情景描写がお上手で、膝を打ちました。
(よし)

神苑に入りて青葉の風となる 二晷

並選 富野香衣・秋霜・しょうん・にこぐさ

並選

俗人の世界から神の領域へ足を踏み入れる。穢れがとれ、青葉の風になるという飛躍が素敵です。
(富野香衣)

素朴だが、捨て難い。
(秋霜)

青葉の風となるという詩的な表現がよいと思いましたが、今日は気持ちよい風が吹いてましたが、青葉溢れる神苑という神聖な場所に立ち入って感じ入ったものが風という描写となったのか？
(しょうん)

御手洗の水の行方や青葉間 町彦

並選 和田桃・二晷・よし・孝

並選

青葉の間からでてきた水。この神聖な水はどこにいくのか。という思いに共感
(和田桃)

御手洗の水は何処へ流れて行くのでしょうか？
(二晷)

水の俳句を作りたかったけど、作れず…。絶えず流れ続ける水と、神社の厳かな雰囲気を感じ取りました。
(よし)

流れの先は見えず 青葉闇が効いています

(孝)

新緑や絵馬の鏡しむに皺しわはなし 疾風

特選 美也子・よし

特選

美を求める絵馬なので皺しわなど書くはずもないが皆同じ顔に見えたのは皺しわが無いからだと気がつきました。

(美也子)

思わずクスツとしてしまう一句！ ナチュラルに現実が見えなくなってしまう(見ないようにしている?) 女心と、新緑という季語がバッチリでした。心はいつまでも青いのです……。

(よし)

3点句

夏の風飛び石渡れば川の風 ひろし

特選 和田桃

並選 一途

特選

天 全身に感じていた夏の風が、飛び石を渡ったとき川と一体感となった。「川の風」瀬音まで聞こえてきそうな。

(和田桃)

スニーカー踏む夏草のここちよさ

ゆたか

並選 清史・ひろし・孝

並選

アスファルトでない足裏の感触が伝わってきました

(孝)

夏川や南へ荷にひ曳ひく高瀬舟 福田洗弥

並選 富野香衣・柚実・太陽

並選

夏川と舟に近さを感じますが、吟行句として風情豊かな景が見えます。

(富野香衣)

最初に森鷗外の小説が浮かびましたが、今は穏やかに流れる川に荷が運ばれる平和な感じがしてほっとしました。

(柚実)

青鷺や鴨川デルタ監視中 にこぐさ

並選 美也子・ひろし・石黒

並選

鷺があちこちの川のなかに立っています。それを監視しているとは面白い発想です。

(美也子)

狛犬の口より吐かれ瑠璃蜥蜴

富野香衣

特選 秋霜

並選 しゃぼん

特選

瑠璃蜥蜴の色も動きも鮮やか。迫力が目に迫って来た。

(秋霜)

並選

口からとかげがでる。これも怪異。瑠璃色がそれを上書きする。

(しゃぼん)

水無月に隠しきってる角隠し 孝

特選 疾風

並選 よし

特選

今日の吟行句で神前結婚のあの白無垢と角隠しを題材にと思ったけれど、投句しませんでした。さらっと詠まれてあるので選びました。

(疾風)

並選

これからの幸せと乗り越えるべき諸々を感じました。

(よし)

中天に微かなノイズ梅雨に入る

富野香衣

特選 ゆたか

並選 町彦

特選

曇天の中、遠くに雷の気配。梅雨の始まりの不安定な雰囲気をよく感じる。(ゆたか)

妻絹ごし我は木綿の冷奴

大美

並選 清史・和田桃・宮本こぼ

並選

吟行ではないが朝の食卓の光景かも。微笑ましい夫婦が見えてきました。(和田桃)

杉戸絵の部屋に風鈴鳴る気配

西山文子

特選 にこぐさ

並選 しゃぼん

特選

風鈴の音ではなく気配と詠まれたところに美しさを感じました。(にこぐさ)

木下闇古書市に乱歩初版本 しゃぼん

特選 宮本こぼ
並選 一途

特選

木の下での古本市、よくある俳句だが「初版本」に惹かれたが、たぶん作者の創作では：
(宮本こぼ)

別邸の池はひょうたん苔の花

西山文子

並選 和田桃・宮本こぼ・福田洗弥

並選

下から見たらわからないが、二階に上がると ひょうたんのよう

苔の美しい庭です。(和田桃)

雷の神は音無し木下闇

よし

特選 しゃぼん

並選 清史

特選

いかづちでありながら音がない。より怪異の度がたかまる。あたかも天神縁起絵巻のいかづちである。木下闇にはもとより音はない。いっそうの不気味が重なる。
(しゃぼん)

朱の鳥居くぐりて嫁ぐ梅雨晴間 太陽

特選 洋子

並選 柚実

特選

下鴨神社で何組か花嫁さんにお会いしました。日本では梅雨時のジューンブライドですが今日は梅雨晴れ間でよかったなどおもいました。鳥居をくぐりて嫁ぐに花嫁の覚悟が感じられました。(洋子)

並選

今日出会えた素敵な異人の花嫁さんを思い浮かべながら。お二人に幸あれ。(柚実)

松の芯父は四の五の言はぬ人 秋霜

並選 和田桃・石黒・太陽

並選

威厳ある父の姿 この豪商の主もこんな風だったかも。(和田桃)

あてどなき川辺の祈り黒蜻蛉

福田洗弥

特選 太陽

並選 文蔵

特選

わかりやすく良い

(太陽)

叡山を羽交締(はがいじ)めせし雲の峰 秋霜

並選 二晁・文蔵・一途

並選

比叡山を羽交締めとは大きな景を詠みま
した。 (二晁)

豪放磊落に詠み抜けた痛快作! (文蔵)

紫陽花や佳人^{かじん}を仰ぎ鏡札 しょうん

並選 洋子・疾風・柚実

木下闇行きつ戻りつ賀茂御祖^{かもみおや} 疾風

特選 福田洗弥

並選 清史

特選

まっすぐの道なんです、まっすぐ参る
のではなくて「行きつ戻りつ」している景が
しっくりきました。

糺の森の暗さ、参道の迷い、神社に近づく
身体を感じます。 (福田洗弥)

鴨川の瀬音軽やか夏に入る 秋霜

特選 にくぐさ
並選 文蔵

特選

瀬音軽やかという響きが夏に入るとい
う季語の心持ちに良く合うと思います
(にくぐさ)

更衣隠れし傷の頭れり 大美

並選 ひろし・秋霜・柚実

並選

思わず苦笑い。似たような句を作ったこ
とがある。 (秋霜)

身体の傷、心の傷、衣更の季節の明るい
光にさらけ出してもいいじゃないですか。
(柚実)

2点句

淋しさを全部抱きしめ木下闇 宮本こぼ

並選 文蔵・ゆたか

木下闇妻の隣へ蝶来る しょうん

特選 一途

特選

陰と生の対比が見事、何よりも情愛の優し
さが羨ましい。 (一途)

水馬(あめんぼう)ぷくりと水を凹ま
せて 秋霜

並選 富野香衣・一途

並選

ぷくりのオノマトベがいいですね。また、
凹むの字体の選択が絶妙! (富野香衣)

鴨川の兩岸涼し思索道 和田桃

並選 孝・太陽

並選

飛び石を渡ったチームと対岸を歩くチー
ム どちらも俳句考えながらの鴨川散策で
した (孝)

対岸の吟行の友日傘揺れ 洋子

並選 美也子・和田桃

並選

鴨川を歩いていて何人がが石を渡って対岸にいきました。川を挟んで歩く様子を上手く句にしたなあと思いました。(美也子)

兩岸に分かれて歩いた光景

お互いの仲間を気にしながら。(和田桃)

六月や門前だんご艶つやし しょうん

並選 清史・にこぐさ

飛び石の乾きへ跳ぶや梅雨晴れ間

しょうん

並選 二晁・よし

並選

鴨川にある飛び石、晴れてて良かったです。(二晁)

滑らないように必死で飛ぶ姿が季語と

マッチしてました。

(よし)

初夏の季語探す吟行三井邸

石黒

並選 町彦・美也子

風鈴や玻璃に庭ある奥座敷 福田洗弥

並選 ゆたか・一途
選外 しゃぼん

神の声ひそむ糺の木下闇

石黒

並選 二晁・洋子

並選

糺の森にはいかにも神が宿っている感じがします。(二晁)

梅雨晴れや美人が並ぶ鏡絵馬

洋子

並選 石黒・一途

咲き初みて糺の森の額の花

太陽

並選 秋霜・ゆたか

並選

初みての表現が、ちょっと気になるが。

(秋霜)

パッチギのデルタの決闘南吹く 洋子

並選 宮本こぼ・太陽

緑蔭にノートとる人風そよぐ ゆたか

特選 ひろし

特選

日陰を通り抜ける風の心地よさをどこことなく感じる句だと思い、特選に選びました。(ひろし)

結葉の陰を辿りて鳥居まで にこぐさ

並選 ゆたか・太陽

別邸は南西に縁薄暑光

町彦

特選 富野香衣

特選

吟行ならではの句。薄暑光が上中の景を引き立てています。

南西と具体的に表記したところが特によいと思います。(富野香衣)

薫風や糺の森を二人ゆく 西山文子

特選 文蔵

特選

ふたりを吹き抜ける南風。あくまでも爽やかなカップルの思慕の生命力を感じさせました。(文蔵)

1点句

ぎこちなく川を渡りて夏の草 美也子

並選 ひろし

鏑矢の紵の杜を抜け夏天 富野香衣

並選 よし

並選

「かてん」と最後にスパッと切り切る形が
鏑矢のスピードによくマッチしていると思
いました。(よし)

風薫る美麗祈願の鏡絵馬 二晁

並選 石黒

薫風や目もとつぶらな鏡絵馬 和田桃

並選 しょうん

並選

いくつかの鏡絵馬の句の中でこの句は説
明ではなく具体的な描写がいいと思いまし
た。(しょうん)

勇氣なし飛び石渡る夏流れ ゆたか

並選 よし

並選

自分も飛ぼうとしていたが意外と怖い。
共感しました。(よし)

嫗あり茶室に凜と夏衣 ゆたか

並選 文蔵

並選

嫗の姿を回想した。嫗ありという凜然た
る措辞が効いている。(文蔵)

水占の青葉の影を集めけり 富野香衣

並選 洋子

深緑梅檀の陰足止まる 柚実

並選 秋霜

御祓する川に句を書く水の筆 しゃぼん

並選 疾風

川べりに森には森の夏の風 太陽

並選 町彦

木下闇「ふたば」の列の折り返す 宮本こぼ

並選 ゆたか

うすもので足駄男と五条橋 しゃぼん

並選 福田洗弥

紫陽花や白く膨れてまた白く 清史

並選 町彦

水飛沫浴びて光し七変化 孝

並選 和田桃

並選

紫陽花は水が好き 紫陽花自身が喜びを
示しているのかも。(和田桃)

鏡絵馬新樹の森に笑顔掛け 石黒

並選 二晁

並選

難しい顔をした絵馬はありませんでした。
(二晁)

物怪や糺の森の木下闇

孝

並選 洋子

縄文人に出来へそうなる木下闇 二泉

並選 富野香衣

並選

縄文人には会ったことはもちろんありませんが、作者の中にはイメージとしての縄文人が存在します。

木下闇の不思議な領域に、縄文人が過去からワープしてきたように感じます。

(富野香衣)

白鷺一羽凜と川の中

美也子

並選 文蔵

走り梅雨若手が退職の挨拶

清史

並選 しゃぼん

並選

梅雨がさっと通り過ぎる。若手はもう退職する。早い、と熟練の仕事人はなげく。

(しゃぼん)

梅雨晴れ間一気にカーテンを洗ふ

清史

並選 しゃぼん

湧き水は神のささやき風薫る 二泉

並選 和田桃

並選

神のいる森の清水 神のささやきとは、優しい詠み (和田桃)

精霊の行きつ戻りつ木下闇にこぐさ

並選 石黒

緑陰の朱に導けり額紫陽花

柚実

並選 疾風

「グッド・バイ」埋れし玉川木下闇

一途

並選 宮本こぼ

神戸勝つ檜田の石碑(いし)へ南風吹く

一途

並選 宮本こぼ

紫陽花や人涼しさを言ひ合へり 疾風

並選 町彦

風鈴賑やかに句会始まりぬ 美也子

並選 町彦

Yの地図片手に万緑の中へ 一途

並選 宮本こぼ

水を売る出町柳の薄暑かな 町彦

並選 しょうん

並選

薄暑とは5月頃の初夏のことかとは思いますが、京都の地名とその京都の初夏とはいえ蒸し暑さを感じさせる印象がよく合っていると思いました。(しょうん)

動くのは田植え機のみ車窓かな

ひろし

並選 美也子

並選

見渡す限り水田が広がっている景色が浮かびました。田植えの時期のあるあるです

ね。
(美也子)

六月の風のまろびて媛小松ひめこまつ しょうん

並選 富野香衣

並選

中心は「風のまろびて」でしょう。柔らかな風と風景、そして作者の心情を表に出さずに淡々と詠んだところが秀逸だと感じました。
(富野香衣)

怪異への入口京の木下闇 町彦

並選 しょうん

0点句

父の日や母の日ほどの想いなく 大美

水無月や絵馬で勝負す化粧室 疾風

駆け抜ける汗も流るる賀茂の川 ひろし

木下闇京都盆地を風ひるげ 文蔵

臍出して澄ます娘や梅雨晴間 美也子

木下闇朝まだ消えぬ庭園灯 大美

半百年斑鳩響もす鴨の岸 文蔵

停戦の合意はどこへ木下闇 石黒

梅雨入りの瀬見のせせらぎ緩やかに 和田桃

夏桔梗昔話の溢れでる 西山文字

パンくずに鴨の子連れて川涼み 柚実

まだ鴨川のこわれていない夏の朝 宮本こぼ

夏羽織ふた月遺す如意ヶ嶽 文蔵

夏木立抜けて朱塗の鳥居あり 福田洗弥

緑陰の玉砂利鳴らし吟行路 洋子

鏡み有る河合神社に風薫る 孝

ビュンと来る自転車の人半ズボン ゆたか

境内の酒売りのれん朝涼し よし

青葉風豪商たちの夢の跡 二晁

鴨川の笛吹き止みて梅雨晴間つゆはれま よし

足疲れ噂はにじむ木下闇 福田洗弥

根付く迄あと幾日の植田かな 清史

木下闇ヒョウタンボクの紅の毒 柚実

螢火や川端に立つ古書の市 しゃぼん

風鈴や風も人も忙せわしなく ひろし

高校生カップルらしき木下闇 清史

出待ちせり瀬見の小川の螢火は 一途

泡を抱く御手洗川の清水かな にごぐさ

精霊の木下闇より飛び出しぬ

富野香衣

梅雨晴間人は花なり池の庭 西山文子

木下闇命の水と光差す

孝

囁きはただす糺こしたやみの森や木下闇

よし

川遊び梅雨の晴れ間の昼下がりに

ひろし

夏澄めり糺の森の蹄音

文蔵

風鈴の音色は句会のBGM 石黒

バラ園に最後の輪凧とあり 大美

どの花にしようか蜂のホバリング

秋霜

中庭の棕櫚竹の黙梅雨曇 にこぐさ

夫婦めおとむく棕真似て我が家の庭きよに居す 疾風

梅雨晴間約束ひとつ胸にして

宮本こぼ

梅雨空を抜けて寄り添めおとむくう夫婦棕 洋子

チークキスピアスを揺らす木下闇

文蔵

みそそぎの星屑あつめ螢の夜

宮本こぼ

夏安居やブランチまでの拭き掃除

しゃぼん

青嵐泡ちはやぶる団子喰ふ

一途